價値組織

文學博士　鹿子木員信

宛も衆星日輪をめぐるが如く、多種多樣な日常の我々の仕事は、總てそれが意識的であると無意識的であるとに關はらず、或價値を中心とし、目的とし且つ價値と云ふ骨組に立脚して、熾烈な活動を營んで居るものである。上下貴賤の別なく老弱男女を問はず、あらゆる人間生活の根底をなすものは、即ちこの價値であつて、又總ての人間性の活動をも支配して居るのである。從つて價値組織が錯亂して顚倒して居れば、人間生活も必然の歸結として錯亂して、顚倒することを免れ得ぬのであるから、我々は、此の誤り易く錯亂し勝な價値組織を補正し、啻に個人的のみならず、社會的、國際的にも透徹せる嚴正な價値觀念を各自その中心奥深くに確立し把握しなければならないのである。然らば價値とは如何、と云ふ疑念を抱かざるを得ないのであるが、元來「價値」は甚だ妥當な言葉でないと思ふ。何故なれば「價値」は、支那より傳來せる言葉であつて、物質的評價を意味して居るが故に、現今日本に於ても商業的であり、我利的であり、極めて低級な意味に於て通用されて居るやうに思ふ。外國語にもこれに適應した言葉は

見當らないのであるが、日本語の「尊い」「好ましい」「願はしい」等が第一義的にぴったりと表現して餘す處なしと斷言しても憚らないのであるが、就中、最もプロパーな普遍的なものは「望ましい」と云ふ言葉である。即ち望ましいもの――――吾人の慾望の對象が價値あるものである。望ましいもの、之有難いものであつて、吾人の慾望をアリガタからしめるは、吾人の奮鬪如何に存するのであるから、困難を犯し堅を破りてあらしめるべく努力せねばならぬのである。言葉を變へて云へば理想であるが、この理想は現在眼前に實在せるに非ず、又斯くなりゆくものでもなく、啻吾人の努力如何に歸するのである。望ましいものが即ち有難いもので、有難いものが即ち望ましいものである、かく兩者は相關的であるが故に、如何なるものが有難いかと云ふことは、如何なる希望あるかによつて決定され得るのであるが以上のことに對して、前後上下の嚴正なけぢめをつけなければ價値に對して徹底明白な觀念を把持することは到底不可能な事ではなからうか？然るに吾人の慾望は無限多數であつて、而も慾望は各個獨立せるものでない。千頭一體の蛇の如く多數の慾望は、各自或は右せんとし或は左せんとし、又は矛盾し撞着していがみ合つて居るが、總ては「自我」に根ざして居るのである。千頭一體の蛇の搖籃は即ち「自我の生命」であるが故に、「生命」の向ふ所一點ならば慾望も統一され、然らざれば左往右往裡に碌々たる人生五十徒らに黃粱一炊の夢短きを嘆く盧生の徒となるだらう。唯だ隙行く白馬の速きを呪ふより寧ろ天に唾する自己の愚を悔ゆるべきであらうが、斯くなりては既に臍を嚙むの恨となる。然らば生命とは如

何。古來數多の碩學が生物學的化學的により是を究めんとしたが、醫學者の「生命論」の如く遂に外的な自然科學に依つては說明し盡さないのである。自分は「生命の姿」に對して、自己の意見を述べて見たいと思ふ。自然科學者の言葉を借りて云へば生命は、新陳代謝であると謂ふ。さらば新陳代謝とは如何。廣義に云へば「流轉」であり「運動」である。が新陳代謝のみを以て生命の姿なり、と斷定し得ようか、逝者如水矣と詩人を歌はしめた川の流れは、一秒をも休みなく流轉し運動して、新陳代謝を行つて居るが決して、生きて居るとは云はないのである。總ての有機體が流轉する如く、川の流も新陳代謝を行ふがそは外的であり機械的である。之に反し生命とは自らを創造するものである。自力に依つて行はれる新陳代謝――之即ち不思議な生命の姿であらうと思ふ。

自力による新陳代謝とは、新與滅舊、生と滅とを共有して、是に依つて生命を確保するのである。謂はゞ「生命の辯證法」とでも稱すべきものであらう。從つて生命は無常である。が此處に生命の妙味は、存するのである。飽迄も生きること、即ち、永遠無窮に生きる――不滅不朽は、生命の終局の目的であり、至大の希望であらう。キリスト敎の「限りなき生命」と云ひ、佛敎の流轉無常より解脫して常住を得ること、即ち、「涅槃」に入ることが、人間の最高最後の希望であるとすれば、之より推論して、總ての人間性の憧憬希望は、不滅不朽に關聯して居ると云つても決して過言ではなからう、而も我々の肉體は「時間と空間」とに制限されて居るが故に有限的なものであり、「死」は、何人も避けることの出來な

い必然の運命であるが、一方先哲ソクラテスの如く精神に生きんがために從容として、毒盃を仰ぎし行爲、又は、古聖孔子が「殺身而成仁矣」と喝破せし言句等は、時間と空間とを超越せんとする、傑人の精神的生命の、飛躍であらう。で今暫くは精神的生命と肉體的生命との二元的に分類して論旨を進めてみることにしよう。肉體は、それの成長哺育のために衣食住と、個別的肉體を以て、子子孫孫に依つて「意志の完成」を期せんがために性欲とを要求する。是に於て、物質的價値は、肉體的生命の根本的價値となるのである。然るに全人類の九割までは、是の衣食住性の四欲望に終始し、汲々として居ると斷言しても憚らないのである。殊に自然科學の異常な發達により衣食住獲得欲を空前に膨脹せしめた十九世紀後半期に於ける、あらゆる思想家は唯物史觀に囚はれ、カール、マルクスの如きは、人類の歴史は、生産組織の歴史であると稱するに至つた。が人類社會は集團的なものであるから、從つて物質的價値の上に、更に集團的な、社會的な名譽權力等が生れるのである。人類の九割九分迄は、この物質的或は社會的名譽權力の獲得のため、是等の慾望を滿足せしめるために終始して居るのであつて、殊に最近の政治家の如きは、權力のためには德をも節操をも、蹂躙して何等恥づることなきが如き有樣ではなからうか。次に斯の如き物的及び社會的價値は部分的のものではなからうか？純粹に有難いものだらうか？……否權力金力の如きは事實禍となり勝な傾向を有して居る。即ち心を以て是を支配しなければならないとすれば、之より心にも價値を生じてくるのである。肉體的生命を不滅ならしめる爲には心の生命

に依らなければならない。が而し心の生命を滅すものがある。即ち、匹夫の勇、宋讓の仁――惡である。是に反し心の生命を生成せしめるものは善である。然らば心の生命を支配するもの如何？禪宗の語を借て唯一言「悟」と云はざるを得ないのである。諸德は、魂の外邊に在るもので、中心に耀々と輝く光、之悟りである悟は認識である。斯くの如くにして、求め得た魂の中心より輝き出づる眞如の悟りの上にあれ！是總ての價値組織の母胎であり源泉であり、最上至尊のものであることは、星晨空に燦然たる光を放つより明かなことであると斷言しておきたいのである。

（本講演は本會にて鹿子木博士の口演せられしものを大學新聞記者の覺書き中より同新聞に掲載せしものを本會の講演なるが故に此に錄出せしものなり、博士今や遠く去つて海外に在り、その全講演の本紀要に載する能はざるを憾む、故に本論文の文責固より同記者に在りとす）

明治天皇御製

折にふれたる

花になり實になる見れば草も木も

なべて務のある世なりけり